

東京大学所蔵の渤海遺跡出土遺物に関する小考

中村 亜希子

要旨

現在、東京大学の文学部考古学研究室と総合研究博物館、駒場博物館には、渤海遺跡の出土遺物が保管されている。これらの多くは東亜考古学会が1933年および1934年に渤海の上京城遺跡（黒龍江省寧安所在）を発掘調査した際に取得したものであるが、一部、斎藤甚兵衛（優）が八連城遺跡（吉林省琿春所在）を発掘した際に出土したものも含まれている。これらの調査については報告書が刊行されているが、実はこれ以外にも比較的小規模な調査がおこなわれていたことが、鳥山喜一や斎藤優、駒井和愛らの論文・回想録等から知られる。ただし、戦況の悪化と1945年8月の敗戦による混乱のためか、発掘調査報告は出されていない。また、駒井や三上次男といった調査参加者が東京大学を定年退官した後30年ほどの間、これらの遺物について積極的な調査・研究はなされてこなかった。2000年代に田村晃一が中心となって再調査・報告をおこなったが、その間に失われた情報は多く、遺物の出土状況や東京大学に移管された経緯については不明な点も多い。

そこで本稿ではまず、発掘を伴う調査を中心に戦前・戦中期の日本人研究者による渤海遺跡の調査について調べ、その経緯と背景を明らかにした。次に、戦後に中華民国から返還の要請があった資料の内容を検討し、実際に1951年に台湾の中華民国政府に返還された八連城遺跡出土石仏を追った小野（森田）智子（森田2014）の研究を参考に、戦後に駒井が編集した『考古図編』に掲載された渤海遺物の内容を分析することで、現在東京大学に所在する渤海遺物の中には、1942年7月に駒井らが八連城遺跡の追加調査をおこなった際に出土した遺物が含まれている可能性があることを指摘した。最後に、2000年代の田村晃一の渤海遺物の整理作業について、これまで公にはされてこなかった整理の背景と方針を記し、今後東京大学所在の渤海遺物の研究を進めるにあたり基礎的な情報を提供した。

1. はじめに

東京大学本郷キャンパスの文学部考古学研究室や総合研究博物館、駒場キャンパスの駒場博物館には、戦前に日本人研究者らが取得した渤海国の遺跡の出土資料が保管されている。その大多数は、東亜考古学会が1933年および翌1934年に上京城遺跡（当時は「東京城」等と呼称）を調査・発掘した際に取得されたものであるが、一部、八連城遺跡（当時は「半拉城」等と呼称）で出土したと考えられる資料も混在する。

これらの資料は、戦後、原田淑人¹⁾や駒井和愛²⁾、三上次男³⁾らといった東亜考古学会の調査に携わった研究者が東京大学を退官した後、およそ30年以上にわたり表立って調査・研究されることがなかったが、2000年代に入ってから田村晃一の主導により再整理および研究が開始された。筆者は2003年から5年間ほど、この再整理の作業に参加しており、それ以降現在に至るまで断続的にこれら資料の調査・研究をおこなっている。これまでに、上京城遺跡で出土した瓦磚の研究に関する拙文（中村2006, 2017, 2021

など）を出したが、当該資料の由来について詳しく検討したことはなかった。そこで本稿では、まず、日本人による中国所在の渤海遺跡調査について概観し、次に、これらの調査で取得された渤海遺物のうち現在東京大学に保管されるものが戦後どのような経緯をたどってきたかについて考察する。その上で、2000年代に田村晃一がおこなった東京大学所蔵渤海遺物の再整理の状況をまとめる。

2. 渤海の遺跡と日本人研究者

渤海国（698-926年）の遺跡は、黒龍江省や吉林省など中国東北地方を中心に、北はロシア沿海地方南部、南は北朝鮮北部に分布する。20世紀初頭、1905年に日露戦争が終結し、遼東半島南部の関東州がロシアの租借地から日本の租借地になると、南満州鉄道株式会社（満鉄）の歴史調査部に籍を置く白鳥庫吉をはじめとする日本の東洋史研究者らが、中国東北地方の遺跡踏査をおこなうようになった⁴⁾。ここでは日本人研究者らがおこなった主な渤海遺跡の踏査・発掘について記す（図1）。



図1 本稿で扱う遺跡・博物館等の位置関係

2-1. 白鳥庫吉の上京城遺跡踏査

白鳥の満洲踏査については井上直樹（2017）の研究が詳しいため、ここでは要点のみ記す。白鳥は1909年にはじめて満洲の地で踏査をおこなった⁵⁾。渤海上京城遺跡の存在は、1778年の清で成立した地理書『満洲源流考』等においても知られていたが、金の上京会寧府址として認識されている。しかし、1908年に満洲所在遺跡の踏査をおこなっていた満鉄歴史調査部の松井等は、現在の黒龍江省ハルビン市阿城に所在する白城を金の上京会寧府址と考えた。白鳥の踏査に先だって白城では「上京会寧府」銘の鏡が発見されており、白鳥が訪れた際には金の石碑が発見される。ここに、白城遺跡が金の上京会寧府址であることが確定的となった（白鳥1970）。白鳥は、次に現在の黒龍江省ハルビン市寧安に所在し清代の地誌等で一般に金の上京会寧府址考えられていた「東京城」（以下、断りが無い限り「上京城遺跡」とする）を踏査したが、採集

した宝相華紋方磚の紋様⁶⁾が新羅のものに類似することから、この遺跡が渤海の上京龍泉府址であると判断したという（東亜考古学会1939）⁷⁾。満鉄歴史調査部の調査報告は白鳥の監修のもと1913年に『満洲歴史地理』（箭内ほか1913a・b）として刊行され、第1巻収録の松井等（1913）「渤海国の疆域」において渤海の都城変遷や五京の所在地、境域、交通路等が考察されるが、上京龍泉府が「寧古塔の南なる東京城」（箭内1913：226）すなわち上京城遺跡であることは箭内互の執筆部分にも示されることから、監修者白鳥をはじめとする満鉄歴史調査部の公式見解であったことが窺われる。

2-2. 鳥山喜一による渤海遺跡踏査の開始

1909年の白鳥による上京城遺跡調査を契機として、日本人による渤海遺跡調査・研究の機運は高まった。松井や津田左右吉、池内宏といった満鉄歴史調査部員

以外に、白鳥の教え子である鳥山喜一、満蒙の地で遺跡踏査に励んでいた鳥居龍蔵といった日本人研究者らが渤海五京の所在地について議論を交わしたが、この時期、中国においても北京大学を卒業した歴史学者である金毓黻が渤海史研究を牽引していた。その中で、学士論文を渤海史で執筆し、1915年に『渤海史考』（鳥山 1915）を刊行した鳥山は、1920年代以降、渤海の五京（上京龍泉府・中京顕徳府・東京龍原府・西京鴨緑府・南京南海府）の遺跡を尋ね数多くの現地踏査を実施し、京城帝国大学の教授として奉職した後も、日本の敗戦直前まで渤海遺跡の調査・研究を継続的にこなったという点で特筆すべきである。

『渤海史上の諸問題』に付された紀行文「渤海文化の跡を求めて」によると、鳥山の渤海遺跡踏査は1922年にはじまり、1929年から約2年間中華民国や欧米を歴訪した時期以外、1945年に敗戦を迎え帰国するまでの間、ほぼ毎年のように満洲の地において遺跡の踏査をおこなったことが窺える（鳥山 1968：301-338）。1910年出版の『統監府臨時間島派出所紀要』（統監府臨時間島派出所残務整理所 1910）によって、西古城等すでにいくつかの遺跡については知られていたが、当初から間島一帯が鳥山の主なフィールドであり、1922年夏には西古城遺跡を踏査、1924年には八連城遺跡（半拉城）の存在を知ることとなる。鳥山は1924年および翌1925年には、間島以外に咸鏡南北道を、1926年には寧安の上京城遺跡を調査している（鳥山 1935a, 1939, 1949）。上京城遺跡の調査成果は1928年12月に京都で開催された史学研究会大会で発表され、小冊子が頒布された（鳥山 1935a）。鳥山は1930年には『渤海の上京龍泉府に就いて』を自刊したが、その内容は1935年刊行の『満鮮文化史観』（鳥山 1935b）に「渤海国都上京龍泉府の遺址に就いて」と題し再録される。章末に「昭和三年十二月八日京都史学研究会大会講演手記補」とあり、1928年の発表内容であることがわかる。

2-3. 東亜考古学会による上京城遺跡調査

1920年代半ば、鳥山と同じく白鳥の門下であり2歳年長の原田淑人は、1926年に京都帝国大学の濱田耕作とともに東亜考古学会を立ち上げ、翌年から日本の租借地である遼東半島の旅順付近の遺跡で大規模な発掘を伴う考古学的調査を開始していた。先の鳥山の報告を受けてであろう、東亜考古学会でも1928年頃には上京城遺跡における「比較的大規模な発掘調査」の「必要を痛感し、爾来その実行計画を進めてゐた」（東亜考古学会 1939：2）という。上京城遺跡では1931年9月に東省特別区のロシア人研究者ポノソ

フ（Поносов В. В.）らが宮殿区や御花園（禁苑）の試掘調査をおこなったが、柳条湖事件に端を発して満州事変が勃発すると調査の継続を断念せざるを得なくなっていた。翌1932年3月の「満洲国」⁸⁾の建国宣言後、7月の時点で原田は上京城遺跡の測量を計画していたことがアジア歴史資料センター（JACAR）の資料Ref. B05015878600によって知られる。

抗日ゲリラによる東京城鎮の焼き討ちを経た1933年と翌1934年の初夏、二度にわたる東亜考古学会の上京城遺跡調査が決行された。形式的には「日満合同調査」という形をとり、原田の主導のもと大連工業高等学校教授の村田次郎や京都帝国大学の水野清一、東京帝国大学の駒井和愛と三上次男、帝室博物館の矢島恭介が発掘調査を担当し⁹⁾、東方文化研究所の羽館易等の写真技師が撮影を、関東軍陸地測量部員が測量を担当した。なお、庶務会計交渉の担当としては東亜考古学会幹事の島村孝三郎が同行している。このほか、第1回調査には歴史班として東京帝国大学教授となっていた池内宏、京城帝国大学教授職にあった鳥山喜一、東方文化研究所嘱託の外山軍治、満洲国側として満洲国国立図書館主任の金毓黻と、同館員である金九経が参加した。さらに第1回調査時にはハルビンの東省文物博物院¹⁰⁾でポノソフとも学術交流しており、「殆ど渤海研究者を総動員した観」（東亜考古学会 1939：3）という表現もあながち大げさとは言えない。調査の成果報告書『東京城』は1939年に東方考古学叢刊 甲種第5冊として刊行された（東亜考古学会 1939）。なお、東亜考古学会による調査地の選定・遺構の命名に前述の1928年12月の鳥山による調査成果の報告内容が強く反映されていることは明らかである。鳥山は東亜考古学会の上京城遺跡調査における自分の立場を「オブザーヴァー」と表現するが（鳥山 1968：315）、あるいは同門兄弟子であり、日本の近代考古学研究を牽引する原田を慮ってのことであろうか。

原田が主導した東亜考古学会による上京城遺跡調査の特徴は、遺跡の測量や遺構の実測、写真撮影をふんだんにおこない、当時の日本考古学における最高の知識・技術をもって調査・研究・報告にあたった点にあることは報告書『東京城』（東亜考古学会 1939）の内容から明らかである（図2）。出土遺物の報告には実測図や拓本、写真を多く掲載し、緑釉瓦磚等の図版にはカラー写真さえ用いており、瓦当の分類も当時日本でも注目を浴び始めた型式学的変化を意識したものとなっている。巻末には英文要旨の他、1931年のポノソフの調査概報を露文で掲載するなど、国際学会としての東亜考古学会の立場を明確に示そうとするもので

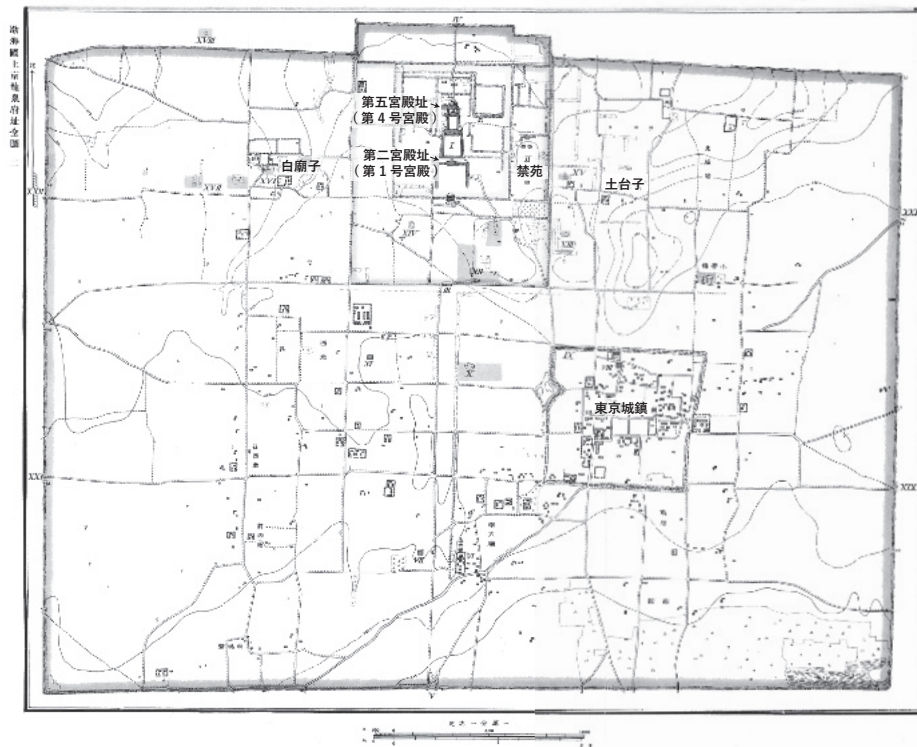


図2 東亜考古学会による上京城遺跡の発掘調査

あった。出土遺物のうち特に脚光を浴びたのは1934年初夏に実施の第2回調査で出土した和同開珎銅銭である。「第五宮殿址」(第4号宮殿)¹¹⁾の西室床面で出土したこの銅銭は、後に満洲国国宝と定められ、満洲国国立博物館奉天分館に収められた(大出2010)。

2-4. 満洲国文教部の設置と東亜考古学会改組

満洲国文教部の設置は、東亜考古学会による上京城遺跡調査の前年である1932年7月5日の教令第50号に遡る(Ref.A06031008800)。第1回調査時の1933年6月には、満洲国領土内にある古蹟および遺物の損失散逸を防ぐ目的で古蹟保存法が制定された(Ref.B05016153400)。東亜考古学会の上京城調査も形式的には文教部管轄下の日満合同調査という体裁をとっており、調査に先立って研究終了後には出土品を返還する旨取り決めがあった。日本に持ち出した遺物は、1933年8月送付分が宮殿址発掘物17箱、寺址発掘物5～6箱¹²⁾であり(図3)、その大半が瓦磚など陶製建築部材であることがわかる(Ref.B05015879500, Ref.B05015879600)。1934年には石獅子1個と各種瓦磚・鴟尾破片34箱を東京帝国大学考古学研究室に送付した¹³⁾。その他、石獅子1個は満洲国国立博物館奉天分館に移送するまで、便宜上、寧安領事館警察署に保管を託し、和同開珎や金具等は原田・島村自らが携帯して帰国したという(Ref.B05015879600:79)。

以上の出土品は、原田主導のもと東京帝国大学考

古学研究室にて整理され、写真撮影や実測図作成をおこなったが、報告書刊行のめどが立った1938年12月、東亜考古学会会長の細川護立は、外務大臣の有田八郎に対し、一部資料を満洲国に返還するための手続きをとった。返還資料の目録には、平瓦7個、丸瓦7個、瓦当12個、鴟尾破片2個、鬼瓦2個、柱座6個、瓦磚6個、壁画残片4個、鉄扉金具5個、石製獅子頭2個、その他瓦片とされ、残存破片は東京帝国大学に保存する旨記される(Ref.B05015875200:28)。なお、ここまでの東亜考古学会による発掘調査は外務省による助成事業としておこなわれてきたが、上京城遺跡調査後の1936年4月、東亜考古学会は助成金の会計報告の不備を指摘され、全般的な監査がおこなわれた。その結果、東亜考古学会は財団法人への早急な改組を要求された(Ref.B05015893600・B05015893700)。以後、助成金は減額され、外務省の対支文化事業の助成を受けた大規模な発掘調査や大冊の報告書である東方考古学叢刊甲種の刊行事業は終焉を迎える。これら東亜考古学会による上京城調査の背景については酒寄雅志(2007, 2023)の研究に詳しく、拙文(中村2017)でも一部紹介した。

2-5. 満洲国文教部による調査

その後、満洲国内における渤海遺跡の発掘調査は、基本的には満洲国文教部や民生部によって囑託された研究者が従事するようになる。その中心を担ったのは

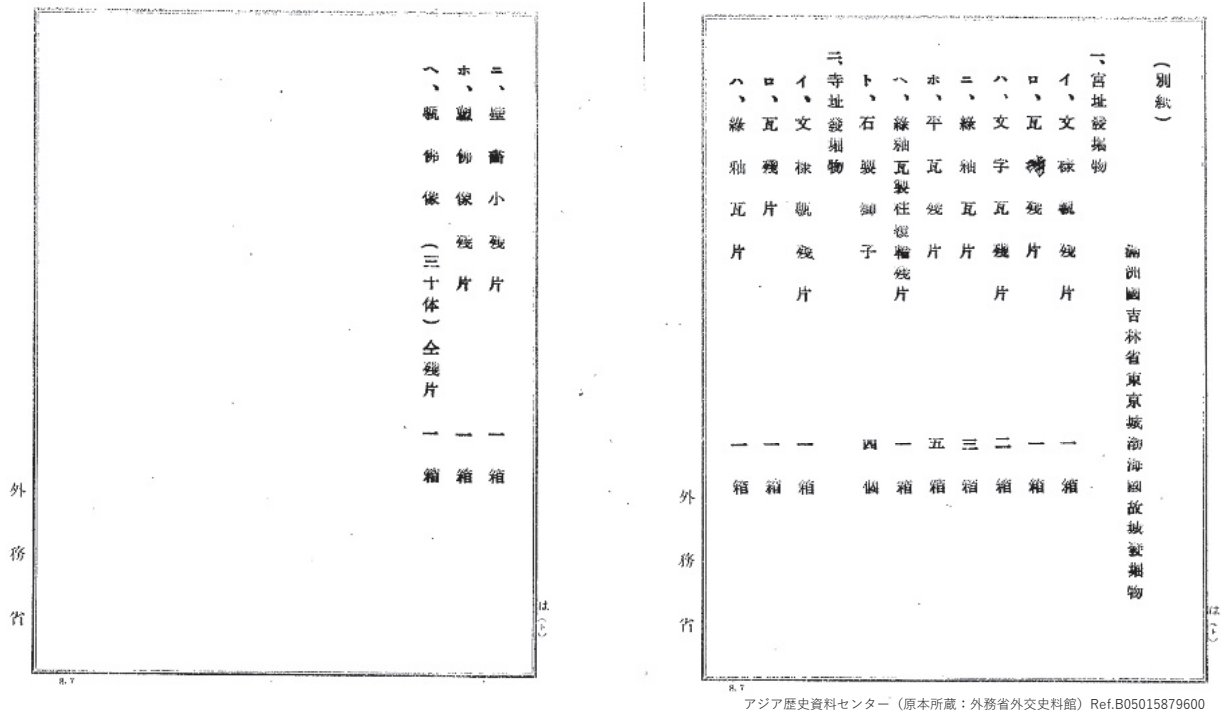


図3 1933年8月に東京帝国大学考古学研究室に送付した上京城遺跡出土遺物

鳥山喜一である。1937年には京城帝国大学の藤田亮策とともに満洲国文教部の嘱託となり、4月から間島省内の古蹟と遺物の調査を任せられ、琿春と延吉の山城や平地城等の調査・発掘を3週間という短期間でおこなった（鳥山1937）。特に力を入れたのは西古城遺跡と八連城遺跡の調査であり、西古城（図4）の発掘調査では内城内の建物を繋ぐ廊址において「東京城第二宮殿址〈筆者註：現在の上京城遺跡第1号宮殿〉所用と同様の花文方磚の破片」が出土し、遺跡の性格について明言は避けたものの、西古城が渤海遺跡の中でも極めて重要な遺跡であることを示唆した（鳥山・藤田1942：57）。いっぽうで、八連城遺跡のプランについては、西古城遺跡に酷似することを指摘するも、「琿春県は目下特別軍事地域として要塞地帯と同様」で、測量・撮影した図や写真が検閲中のため略報には掲載できなかったことが記される（鳥山1937：552）。八連城の図面・写真の掲載は1938年3月に出された「渤海東京考」（鳥山1938）を待たねばならなかったが（図5）、この論考において鳥山は八連城遺跡が渤海の東京龍原府の遺跡であると断じた。

1937年7月1日、満洲国では国务院官制の改革がおこなわれ、満洲国文教部は廃止、業務は新設された民生部が引き継いだ。時を同じくして同年7月7日の北平（現在の北京）郊外では盧溝橋事件がおこり、それを発端に日本と中華民国政府の間で日中戦争が開戦した。これ以降、鳥山は民生部の依頼によって1940年には上京城遺跡の白廟子西方の寺址を、1941年には

西古城遺跡等を、1942年には上京城遺跡の土台子周辺の寺址を、1943年には満洲国民生部の三宅俊成・満洲国国立中央博物館の李文信とともに西古城遺跡を調査した。以後、1945年8月に敗戦を迎える3か月前まで、鳥山は西古城遺跡の調査を続けている（鳥山1968）。三宅によれば、西古城の出土遺物を新京（現在の長春）の満洲国国立中央博物館の研究室に置いたまま敗戦を迎え、「提出した報告書も紙屑になった」（三宅1985：105）。鳥山が京城（現在のソウル）に持ち出していた資料は、現在韓国ソウル大学校博物館が保管しており目録が作成されている（崔夢龍ほか1998）。

2-6. 斎藤甚兵衛による八連城調査

日本人研究者による戦前・戦中の渤海遺跡の調査の中には、考古学を学んだ軍人が発掘した特殊なものがある。1941年および翌1942年の斎藤甚兵衛（優）軍曹による八連城遺跡の調査である（斎藤1942a・b, 1943）。斎藤は1941年7月、関東軍の召集を受け、8月に琿春の兵営へと到着する。予想とは異なりすぐに戦地に赴くことはなく、当時条里制の考古学を研究していたため¹⁴⁾、近場に遺跡がないかと興味を持ったことをきっかけに、1941年9月、斎藤の八連城遺跡調査が始まる。付近に発掘した痕跡のある八連城遺跡があることを知り、軍の上官の許可を得た上で調査に臨んだ。斎藤自身も後に知ることになるのであるが、そこは鳥山が調査した場所であった。内城南壁外東南

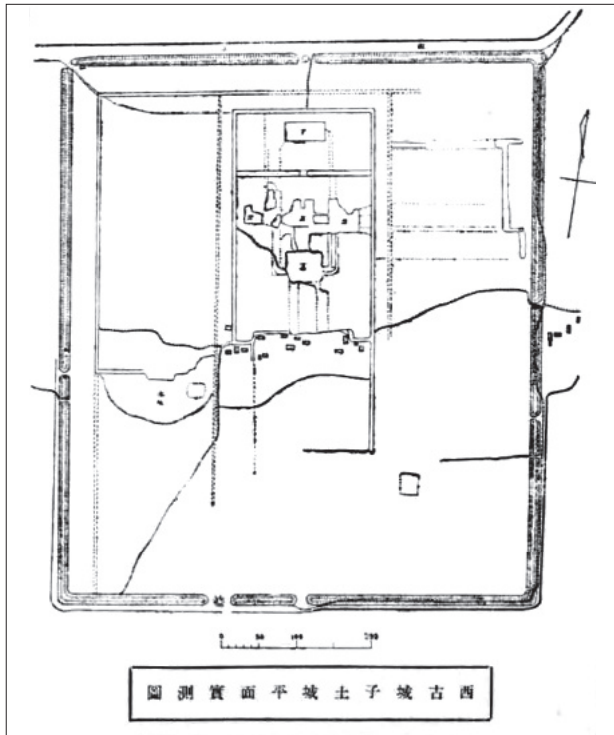


図4 満洲国文教部による西古城遺跡調査

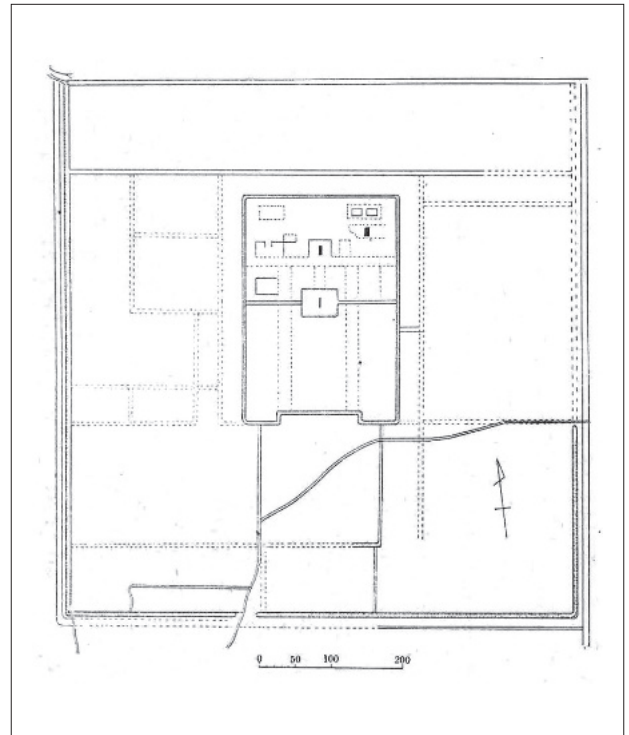


図5 満洲国文教部による八連城遺跡調査

約600 mに位置する「第一廢寺」（八連城東南寺廟址）の建物遺構について鳥山らは金堂址と判断したが（鳥山・藤田1942）、斎藤はこの遺構を掘り下げ、塔心礎を確認したとして塔址と判断し、調査成果を『考古学雑誌』に投稿する（斎藤1942a）。

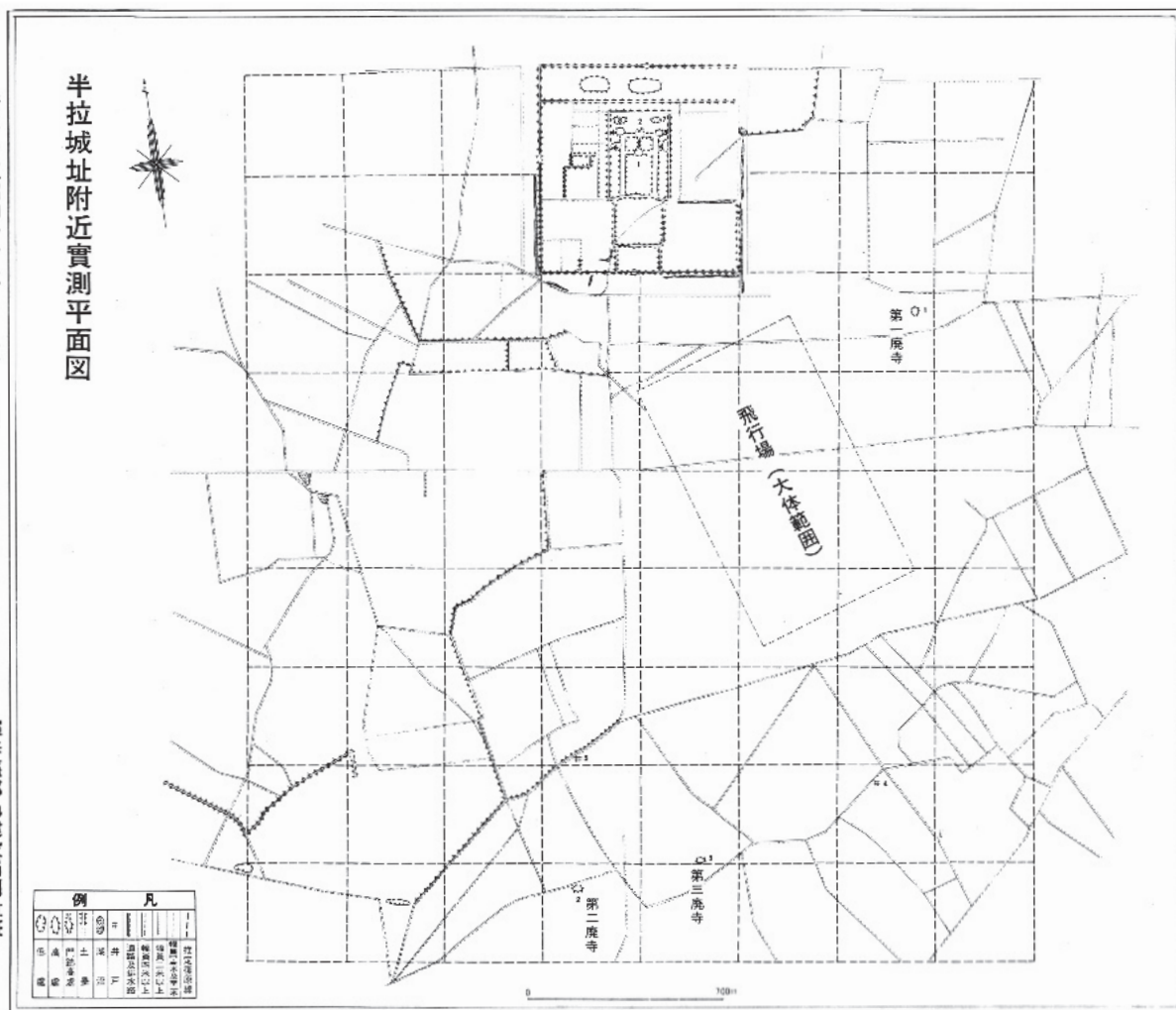
その後、陸軍中將遠山登という理解者を得た斎藤は、上京城遺跡の報告書『東京城』を入手、1942年には琿春県公署の満洲国建国記念事業として八連城遺跡の発掘調査をおこない、報告書『半拉城』（斎藤1942b）を上梓した。この1942年3月の調査は南城壁中央より約2,180 m南の地点から約200 m西側に位置する興仁村四方坨子屯の「第二廢寺」（新生寺廟）とその東方約400 mに位置する「第三廢寺」（良種場寺廟址）の発掘が中心であり、この2つの寺址のうちとりわけ「第二廢寺」では二仏並座像等の石仏が多く出土した。斎藤は、南城壁外に東西相対する寺址が存在することに上京城遺跡との類似性を見出し、八連城遺跡も上京城遺跡と同様に外郭城を持つ構造であると考えた（図6）。斎藤は1942年4月に、目録とともに出土遺物を琿春県に引き渡したが、数か月後には三宅俊成から新京（現在の長春）の文教部¹⁵⁾に移管したい旨相談があったという（斎藤1978:164）。斎藤による八連城遺跡調査の経緯や出土遺物のその後について考察した小野（森田）智子は、斎藤が取得した遺物は琿春県公署から1942年6月22日頃に満洲国文教部¹⁶⁾に、その後は日満文化協会に引き渡されたとする（森

田2012, 2014）。

なお、斎藤が応召した「関東軍特別演習」（斎藤1978:自序）は1941年6月22日の独ソ戦開始に伴うものであり、関東軍が対ソ開戦の準備のために召集したものであった。7月末以降、日本政府がソ連方面（北方）よりも東南アジア方面（南方）に政策の重点を移したため、関東軍特別演習によって増強された関東軍によるソ連侵攻は実行されることがなかったが¹⁷⁾、仮に実行されていた場合、斎藤による八連城遺跡調査は実現しなかったといえる。

2-7. 駒井和愛による八連城遺跡追加調査

斎藤による八連城遺跡の調査は、満洲国の囑託として八連城・西古城両遺跡の調査を継続中であった鳥山喜一のみならず、駒井和愛をはじめとする東亜考古学会関係者、満洲国古蹟古物名勝天然記念物調査委員と満洲国古蹟等保存協会主事を兼任していた三宅俊成などの間に大きな波紋を呼んだことが関係諸氏の回想録から窺える。斎藤と駒井は1942年5月に新京の日満（満日）文化協会で対面して以降、何度か交流する機会があったが、斎藤の回想録には、駒井ら東亜考古学会関係者から冷ややかな態度をとられたことに関する描写が多く見出させる（斎藤1978）。上京城遺跡の調査は、満洲国における古蹟古物の保護体制の整備時期におこなわれたものであり、東亜考古学会関係者は満洲国文教部等との連携に神経を使っていたが、いっぽ



うの斎藤は、すでに鳥山が調査に着手していた遺跡を
関東軍重鎮とのパイプを用いて一方的に掘り進めてし
まったことに加え、民生部¹⁸⁾の許可を得ないままに
発掘調査を遂行してしまったことが最大の理由であっ
たといえる（斎藤〔小野智子翻刻・注解〕2015：14）。
また、斎藤の発掘や測量の方法は、考古学の学術的手
法として認めがたいものであったのだろう。東亜考古
学会による上京城遺跡の発掘調査以来、軍人が軍事上
の演習の「塹壕掘り」と称しておこなう遺物盗掘が横
行しており、三宅は当時その対応に苦慮していた（三
宅1985）。斎藤の発掘もその「塹壕掘り」と大差ない
ものとして受け止められたのであろう。

おり、見学にだけ訪れている（斎藤〔小野智子翻刻・注解〕2015）。なお、調査後に八連城遺跡の遺構を埋め戻す旨知らせを受けた鳥山も、「忘れることの出来ない遺址－いわばわが生みの子－の最後を弔うために」現地を見学に訪れた（鳥山1968：323）。この追加調査の内容は、遼陽漢墓の報告書（駒井1950a）の付録「渤海の仏像 特に二仏並座石像について」（駒井1950b）と、1960年の論文「渤海東京龍原府宮城址考」（駒井1960）によって知ることができる。それらによると、八連城遺跡の追加調査の目的は城址の実測図の作図と、「第二宮殿址」・「南門址」の規模を明らかにすることであったという。宮殿における遺物は瓦等の破片が出土した以外に特になく、二翼の鉄鏃1個を採集した。駒井によると、八連城遺跡で出土した石仏はすべて斎藤が取得したものということであるが（駒井1950b）、三上次男（1968）の論文には、再調査の際には斎藤が調査した「第二廃寺」と「第三廃寺」をも探索し、斎藤が取得したものと同趣の石製仏像の出土を確認したことが記される。

以上が、戦前・戦中期に日本人研究者が主体となっておこなった主な渤海遺跡の調査である。

3. 渤海遺跡出土遺物のその後

日本人が調査・発掘に関わった渤海遺跡の遺物のその後については、満洲国の国立博物館等に残されたもの、鳥山が京城帝国大学に持ち出していたもの、東京帝国大学に送られたもの等の他に、調査に関わった個人が各自日本に持ち帰ったものなど、いくつかの例に分けて考える必要がある。斎藤が個人的に日本に持ち帰った遺物は現在福井県立歴史博物館に収蔵されており、小嶋芳孝が詳細な報告を出している（小嶋 2001, 2005）。本稿では主に、終戦時に東京帝国大学考古学研究室に所在していた渤海遺跡出土遺物のその後について述べる。

3-1. 「掠奪文化財総目録」の渤海遺物

日本の敗戦後、中華民国は1948年6月、日本に対して略奪した文化財を返還させる手続きを始めた。日本では同年賠償庁が組織され、東京大学では駒井和愛が対応にあたった。1940年代後半に作成されたと考えられるリスト『中華民国よりの掠奪文化財総目録別冊』（外務省特殊財産局194-）の「公（古物）」の項目には渤海遺跡関係の古物として、①「三三、吉林市付近古蹟調査 民国廿九年、主要渤海遺物、資料存京城帝大法文学部」、②「三八、琿春半拉城（渤海東京龍泉府址¹⁹⁾）調査 民国卅一年三月、資料存東京帝国大学文学部考古学教室請東大駒井和愛交還」、③「三九、琿春半拉城（渤海東京龍泉府址²⁰⁾）大調査 民国卅一年七月、資料存東京帝国大学文学部考古学教室亦請東大駒井和愛交還」、④「四二、和龍県西古城子（渤海中京顕徳府址）調査 民国卅四年四月、資料存京城帝大請与鳥山喜一交渉追回」という4つの項目が挙げられる（図7）。すなわち、①は鳥山が1940年に上京城遺跡の追加調査をおこなった際の遺物と考えられる。②は1942年3月に斎藤が満洲国建国10周年事業としておこなった八連城遺跡調査の出土遺物、③は「大調査」とあるが、駒井らが同年7月に八連城遺跡の追加調査をおこなった際の遺物を指すと考えられる。④は日本が敗戦を迎える直前の1945年に鳥山が西古城遺跡を発掘調査した際の出土遺物と考えられる。

上記のリストにはいくつか気になる点がある。まずは、1933年および1934年に東亜考古学会がおこなった上京城遺跡調査の出土遺物が返還対象として挙げられていない点である。これは、上述のように1938年12月に東亜考古学会が一部の遺物を満洲国側に返還

④	③	②	①
42	39	38	33
三三、吉林市付近古蹟調査 民国廿九年、主要渤海遺物、資料存京城帝大法文学部	三八、琿春半拉城（渤海東京龍泉府址 ¹⁹⁾ ）調査 民国卅一年三月、資料存東京帝国大学文学部考古学教室請東大駒井和愛交還	三九、琿春半拉城（渤海東京龍泉府址 ²⁰⁾ ）大調査 民国卅一年七月、資料存東京帝国大学文学部考古学教室亦請東大駒井和愛交還	四二、和龍県西古城子（渤海中京顕徳府址）調査 民国卅四年四月、資料存京城帝大請与鳥山喜一交渉追回
（和文説明）	（和文説明）	（和文説明）	（和文説明）

図7 『中華民国よりの掠奪文化財総目録 別冊』の記載

したことによって出土遺物の返還は完了したと捉えた可能性がある。同様に、鳥山と藤田が1937年に満洲国文教部の嘱託として西古城遺跡や八連城遺跡など間島の遺跡を調査した際の遺物も含まれていない。これらの遺物は報告書作成後、満洲国文教部にて保管されたのだろうか。あるいは、京城帝国大学に持ち出して整理作業をした後に、満洲国側に返還されたのであろうか。

いっぽうで、1942年に斎藤が満洲国建国10周年事業として発掘調査した八連城遺跡の出土遺物は、東京大学の駒井和愛に対して返還が要請された。これらの遺物は修理・研究のために東京帝国大学に送付されていたが、駒井の研究・報告が終わっておらず、中華民国への返還時期を延期してもらい1951年に台湾へ返還された（森田 2014）。中華民国政府への渤海遺物の返還経緯については小野（森田）の研究に詳しいが、小野は、二仏並座像を含む八連城遺跡出土遺物が斎藤の手によって日本にもたらされ、その中の一部が東京帝国大学へ送られたとする。しかし、斎藤自身は報告書に掲載された八連城遺跡出土遺物が東京帝国大学の考古学研究室に送られたことについて伝聞でしか知らなかったことを考えると（斎藤 1978）、斎藤自身が日

本へ持ち帰った遺物は1941年9月に個人的に八連城遺跡を調査した時に取得したもの、あるいは1942年3月の発掘調査で取得したが目録に掲載しなかったものだけであった可能性が高い。

最後の④リスト42番の西古城遺跡出土遺物に関してはさらに謎が多い。当該調査で取得した遺物は、三宅(1985)の記憶が正しければ、新京の中央博物館の研究室に置いたままで終戦を迎えたはずである。満洲国の崩壊後、中国共産党が勢力を増した東北地方の状況を確認することができないまま、中華民国政府によってリストが作られたと考えるのが妥当ではないだろうか。

小野によると、1951年に台湾の中華民国政府へ返還された渤海遺物は、現在台湾国立故宮博物院に所蔵されている(森田2014)。満洲国文教部・民生部が管轄していた渤海遺跡出土遺物がその後どのような変遷を経たか、筆者は現時点では十分には検討しきれていない。満洲国国立中央博物館のうち新京本館は自然科学系の、奉天分館は人文科学系の博物館であったが、前身である満鉄所属の教育研究所附属参考館の展示を継承・発展させた新京本館の方でも人文科学色の濃い展示を企画していたという(大出2004)。これら両博物館に所在した資料について一部なりとも中国国内で移動があったのか、あるいは、日本の中華民国に対する掠奪文化財の返還の過程で台湾ではなく大陸に返還された資料があったのか、現段階では定かではない。しかし、上京城遺跡で出土し『東京城』(東亜考古学会1939)に掲載された三彩香炉の破片が現在の中国国家博物館に所在することを考えると²¹⁾、満洲国国立博物館奉天分館の資料を引き継いだ遼寧省博物館以外の場所にも、日本人研究者らが発掘調査に関わった渤海遺跡の遺物が所在する可能性がある。

3-2. 『考古図編』の渤海遺物

東京大学考古学研究室が出した所蔵遺物のカード式カタログ『考古図編』には、渤海上京城遺跡および八連城遺跡出土遺物が散見される。『考古図編』第1輯の出版は1927年4月であり、原田淑人はその「序言」において、1923年の関東大震災によって考古学研究室の蒐集品と参考図書の全部を失い、研究に大きな支障を来したことを述べる。「考古学は豊富な物的資料を獲なければその研究の進歩は到底望まれない」とし、「博く研究資料の交換を行ふことを切望する意味に於いて」この図編を刊行することにしたという(東京帝国大学文学部考古学研究室1927)。編集は、第1輯から1936年に刊行された第10輯までを原田が担当し、戦後に刊行された1951年の第11輯から1964年の

第20輯までを駒井和愛が担当した。これら『考古図編』に掲載された渤海遺跡関係遺物の一覧を表1に示す。表の「遺物名称」は『考古図編』の名称を踏襲したが、「出土遺跡」は現在の呼称で記した。「備考」には『考古図編』に書かれた解説・写真等から読み取れる重要な点を記した。

『考古図編』全20輯のうち、渤海の遺物が掲載されるのは第4・12・16・17・18輯の5冊である(東京帝国大学考古学研究室1930; 東京大学文学部考古学研究室1952, 1958, 1959, 1960)。原田が編集した戦前の『考古図編』に掲載された渤海遺物は、第4輯の図版30だけである。これは1909年に白鳥庫吉が上京城遺跡で採集し、東京帝国大学に持ち帰った遺物であり、関東大震災で唯一失われずに残った宝相華紋方磚である(図8-1)。いっぽう、戦後に駒井によって刊行された『考古図編』には多くの渤海遺物が掲載される。台湾へ遺物を返還した翌年である1952年に刊行した第12輯は渤海の遺物を5点掲載する。内訳は上京城遺跡付近での購入品が3点、上京城内の土台子で出土したといわれるものが1点、八連城遺跡関連遺物で最も知名度が高い完形の二仏並座像が1点(図8-6)である。解説において、上京城遺跡資料については「東亜考古学会寄贈」、八連城の二仏並座像については「満日文化協会寄贈」の文字が見える。前年までの返還事業を気にしての文言と考えられるが、1933年に成立した日満文化協会すなわち「満日文化協会」は1945年度をもって解散しているため(Ref. B05016057200)、寄贈されたことが事実であるならば、それは1945年以前のこととなる。なお、斎藤が八連城遺跡周辺の寺址で取得した石仏のうち、残存状況が比較的良好な他の石仏は台湾の中華民国政府へと返還されている(森田2014)。

その後、1958年から3年間は『考古図編』に渤海遺物の掲載が続く。1958年刊行の第16輯には上京城遺跡出土の磚仏3点と、八連城遺跡の瓦当2点および銅鏡1点が収録され、前者には「東亜考古学会寄贈」、後者には「日満文化協会寄贈」の説明が付される。いずれも出土品であるが、八連城関係遺物のうち図版24-1の瓦当と図版25-1の銅鏡は「半拉城の渤海寺院址から見出されたと伝うる」のように伝聞表現で記され、写真からは斎藤の報告書(斎藤1942b, 1978)に掲載された資料であることがわかる。いっぽう、図版24-2の瓦当(図8-2)は『半拉城』や『半拉城と他の史蹟』には写真等が掲載されず、駒井が「宮殿廊下あとから発見されたもの」(東京大学文学部考古学研究室1958: 9)と断言することから、1942年7月に駒井らが八連城遺跡の追加調査をおこなった

表1 『考古図編』掲載の渤海遺物

『考古図編』	刊行年	図版番号	遺物名称	出土遺跡	備考
第4輯	1930年	図版30	花紋甃	上京城遺跡	1909年に白鳥庫吉が採集し、関東大震災で焼け残った宝相華紋方磚
第12輯	1952年	図版12-1	中華民国寧安東京城出土銅馬	上京城遺跡	購入品（東亜考古学会寄贈）
		図版12-2	中華民国寧安東京城出土鉄鐸	上京城遺跡	購入品（東亜考古学会寄贈）
		図版19	中華民国琿春半拉城出土石仏	八連城遺跡	（満日文化協会寄贈）
		図版20-1	中華民国寧安東京城出土金銅仏	上京城遺跡	東京城滞在中に購入（東亜考古学会寄贈）
		図版20-2	中華民国寧安東京城出土磚仏	上京城遺跡	内城東南の土台子から出土したものと云われる（東亜考古学会寄贈）
第16輯	1958年	図版23-1	中国黒竜江省寧安県東京城出土磚仏	上京城遺跡	観音立像、発掘出土品（東亜考古学会寄贈）
		図版23-2	中国黒竜江省寧安県東京城出土磚仏	上京城遺跡	やや小さい座像（東亜考古学会寄贈）
		図版23-3	中国黒竜江省寧安県東京城出土磚仏	上京城遺跡	座像、図版23-1とともに寺址内陣奥壁付近で見つかる（東亜考古学会寄贈）
		図版24-1	中国吉林省琿春県半拉城出土瓦当	八連城遺跡	寺院址の一つから出土したものと云われる（日満文化協会寄贈）
		図版24-2	中国吉林省琿春県半拉城出土瓦当	八連城遺跡	宮殿廊下あとから発見されたもの（日満文化協会寄贈）
		図版25-1	中国吉林省琿春県半拉城出土銅鏡	八連城遺跡	半拉城の渤海寺院址から見出されたと伝うる（日満文化協会寄贈）
第17輯	1959年	図版22-1	中国琿春半拉城出土石仏頭部	八連城遺跡	高さ13cm、宮城の外にあった寺院の廃址から見出された
		図版22-2	中国琿春半拉城出土石仏頭部	八連城遺跡	高さ10cm、宮城の外にあった寺院の廃址から見出された
第18輯	1960年	図版8	中国黒竜江省寧安県東京城出土瓦当	上京城遺跡	完形軒丸瓦（6弁ハート形複弁蓮華紋）、出土品
		図版9-1	中国黒竜江省寧安県東京城出土瓦当	上京城遺跡	瓦当（7弁ハート形複弁蓮華紋）、出土品
		図版9-2	中国黒竜江省寧安県東京城出土瓦当	上京城遺跡	瓦当（7弁ハート形複弁蓮華紋）、出土品
		図版10-1	中国黒竜江省寧安県東京城出土瓦当	上京城遺跡	瓦当（6弁ハート形複弁蓮華紋）、出土品
		図版10-2	中国黒竜江省寧安県東京城出土瓦当	上京城遺跡	瓦当（6弁ハート形複弁蓮華紋）、出土品
		図版11-1	中国黒竜江省寧安県東京城出土瓦当	上京城遺跡	小型瓦当（5弁ハート形複弁蓮華紋・緑釉）、出土品
		図版11-2	中国黒竜江省寧安県東京城出土瓦当	上京城遺跡	小型瓦当（7弁ハート形複弁蓮華紋）、出土品
		図版11-3	中国黒竜江省寧安県東京城出土瓦当	上京城遺跡	小型瓦当（6弁ハート形複弁蓮華紋）、出土品
		図版12-1・2	中国黒竜江省東京城出土長方磚	上京城遺跡	唐草紋長方磚、出土品
		図版13	中国黒竜江省東京城出土瓦製品	上京城遺跡	鬼瓦、第四宮殿址（現第3宮殿）西方の畑で出土
		図版14-1	中国黒竜江省東京城出土瓦製品	上京城遺跡	施釉陶製品（獸形器脚）、出土品
		図版14-2	中国黒竜江省東京城出土瓦製品	上京城遺跡	魚形施釉陶製品、出土品
		図版15-1	中国吉林省琿春県半拉城出土仏像断片	八連城遺跡	第二廢寺址より出土した石仏で、顔の一部に金箔が遺存、出土品
		図版15-2	中国吉林省琿春県半拉城出土仏像断片	八連城遺跡	光背の一部、出土品
		図版15-3	中国吉林省琿春県半拉城出土仏像断片	八連城遺跡	第二廢寺址出土の磚仏破片、顔面に金箔と黄色の釉薬
		図版15-4	中国吉林省琿春県半拉城出土仏像断片	八連城遺跡	二仏並座像の光背、出土品
		図版16-1	中国吉林省琿春県半拉城出土仏像断片	八連城遺跡	石仏頭部、出土品
		図版16-2	中国吉林省琿春県半拉城出土仏像断片	八連城遺跡	石仏頭部、出土品
		図版16-3	中国吉林省琿春県半拉城出土仏像断片	八連城遺跡	二仏並座石像の一部、第二廢寺址より出土、褐色の色彩が残存（斎藤1978の写真の状態から接合）
		図版17-1	中国吉林省琿春県半拉城出土仏像断片	八連城遺跡	第二廢寺址出土の二仏並座像断片
		図版17-2	中国吉林省琿春県半拉城出土仏像断片	八連城遺跡	第二廢寺址出土の二仏並座像断片
		図版18-1	中国吉林省琿春県半拉城出土仏像断片	八連城遺跡	第二廢寺址出土の仏像の断片（石仏）
		図版18-2	中国吉林省琿春県半拉城出土仏像断片	八連城遺跡	第二廢寺址出土の仏像の断片（磚仏）
		図版19-1	中国吉林省半拉城出土塑像断片	八連城遺跡	塑仏の指、出土品
		図版20-1	中国黒竜江省東京城出土石製獅子頭	上京城遺跡	上京竜泉府址発見
		図版20-2	中国黒竜江省東京城出土石製獅子頭	上京城遺跡	上京竜泉府址発見（東亜考古学会寄贈）



注：写真の縮尺は1が約1/4、他は約1/2

図8 『考古図編』掲載の渤海遺跡出土遺物

際に出土した遺物の可能性があると考える。同様に、1959年刊行の第17輯に掲載された八連城遺跡出土の石仏頭部2点(図8-3・4)も、同一遺物と確認できる写真が斎藤の報告書には認められない(東京大学文学部考古学研究室1959)。

1960年に出された『考古図編』第18輯には、合計26点の渤海遺物が掲載される。上京城遺跡のものはそのうち14点であるが、完形軒丸瓦1点と瓦当7点、長方磚と鬼瓦が各1点、石製獅子頭が2点と、大多数が建築部材であり、上京城遺跡で出土する標識的な建築部材を網羅するような形となっている。八連城遺跡の資料は12点掲載されるが、すべて仏像(石仏あるいは塑仏)の破片である。一部の資料は斎藤の報告の群像写真に認められるが、東京帝国大学に資料が移管されてから接合されたと思われる資料(図8-5)も存在する。ここでは、斎藤の調査によって出土した資料についても「出土した」と断言しており、第16輯までの解説文とは様子が異なる。上京城遺跡の石製獅子頭のうち図版20-2の資料についてのみ「東亜考古学会寄贈」と記される(東京大学文学部考古学研究室1960)。

最後の『考古図編』第20輯が刊行されたのは1964年のことである(東京大学文学部考古学研究室1964)。翌1965年に駒井は東京大学を定年退官したが、1966年4月には現在の東京大学総合研究博物館の前身である東京大学総合研究資料館が開館した。『考古図編』に掲載された渤海の遺物は、基本的にこの博物館と考古学研究室の列品室に収蔵されている。

なお、駒井以外に、上京城遺跡調査に参加した三上次男も、戦後から1960年代にかけて渤海考古学に関する論考を多数発表した。とりわけ戦後すぐの1947年に発表した「渤海の瓦」(三上1947a・b)は、瓦当紋様と年代の関係や、紋様の特色とその背景を考察する等、後述する田村晃一以降の日本の渤海考古学における瓦研究の基礎を築いたといえよう。三上が、現在の東京大学駒場博物館の前身であり1951年に設立された東京大学教養学部美術博物館の立ち上げに関わったためか、同博物館にも瓦磚を中心とした若干の上京城遺跡出土遺物が存在する。

4. 田村晃一による渤海遺物の再整理

4-1. 再整理前夜

駒井と三上の東京大学退官以降、約30年の間、東京大学所蔵渤海遺物は本格的に調査・研究されることがなかった。2000年代に東京大学所在の渤海遺物の再整理をおこなった田村晃一によると、「〈筆者註：田村が〉学生のころは研究室前の廊下に設置された木製

の棚に数多くの平箱が積んであり、その中に東京城の遺物が入っていたことは承知していた。しかしその後、研究室の移動にともない、こうした遺物は地下の倉庫に移され、人目に触れることなく、長い間収納されてきた」(田村2005b:187-188)。これらの資料の中には、田村も指摘するように、アルファベットのGもしくはMと3桁の数字からなる白色の注記が施されたものがある。Gは瓦当、Mは文字を押印した瓦に付されており、瓦当や文字押印瓦のみ分別して集めた箱も存在するが、この注記が施された経緯について詳細は伝わっていない。

田村は1989年に三上次男の遺著『高句麗と渤海』(三上1990)を編集したことを契機に渤海の考古学研究に関心をもち、その後、北方ユーラシア学会の事業の一環として1992年にロシア沿海地方の渤海遺跡の踏査を開始したという。1996年以降は2009年に至るまで毎年のように当該地域に赴き、「日本道」すなわち日本と渤海の交流拠点であるクラスキノ城址の発掘調査を手がけた(田村2011)。その過程で、渤海の瓦当紋様の研究に着手し、2001年に渤海の瓦当に関する論文「渤海の瓦当文様に関する若干の考察」(田村2001)を上梓した。当該論文では東京大学所蔵資料について言及しなかったが、その後、東京大学において出土遺物を目の当たりにしたことから再整理の必要性を痛感したという(田村2005b)。

4-2. 田村による渤海遺物の再整理

田村は2002年度から東京大学所在の渤海遺物の再整理を開始したが、時期を同じくしてこの頃、渤海遺物等が収蔵されている地下倉庫の天井が老朽化に伴い崩落し、修理のために急遽収蔵遺物を移動する必要が生じていた。2003年度、博士課程に在籍していた庄田慎矢を中心に、筆者を含む学部3年生3名の手伝いのもと、遺物を古い木箱から新しい灰色のコンテナへと移す作業がおこなわれた。

この地下倉庫内の遺物の移動と同時進行の形で渤海遺物を再整理していた田村は、2002年度から2003年度の事業として平箱100箱分の整理を、翌2004年度には残りの平箱約100箱分の整理をおこなった。2003年度までの整理作業は、当時考古学研究室に在籍していた鄭仁盛夫妻が、2004年度の整理作業は著者をはじめとする考古学研究室の学部生らが補佐にあたった。以下、当時の整理作業の手順と方針について筆者が記憶していることを記す。

遺物は当初、木製の平箱に収納され厚く埃が堆積していた。先述のように、瓦当のみ・文字押印瓦のみまとめて入った平箱があるいっぽうで、戦前の新聞紙に

包まれ、あるいは布袋に入れられたまま、開けた痕跡のない遺物が収められた平箱、「渤海」と書かれたカードが入っているものの渤海以外の遺跡で出土したと思われる遺物が収められた平箱など、内容物の状況を確認することは容易ではなかった。渤海の遺物と判断できるもの、もしくは可能性があるものが入った箱に「渤海東京城」を意味する「BT」から始まる箱番号を与え、遺物の埃を払い、洗浄できる遺物は洗浄し、新しい灰色のコンテナに移す。木箱の中で包みなどの単位が認められる場合は、その区分を崩さぬように記録をとりながら作業をおこなった。ひとつの木箱の遺物がコンテナひとつに収まりきらない場合は、箱番号の後に①・②の丸数字を記した。

田村による再整理作業の開始当初、地下倉庫の渤海遺物は基本的に「東京城」すなわち上京城遺跡出土のものであると考えたのか、渤海遺物らしき資料が収められた箱はすべて「BT」と記された。しかし、作業が進む過程で「半拉城」と記された遺物等がみつき、上京城遺跡出土遺物と八連城遺跡出土遺物が混在している木箱も存在したため、田村は八連城出土遺物が収められた箱にも便宜的に「BT」の箱番号を与えている。また、個々の遺物には白色ないしは黒色で新たな資料番号が注記された。資料が入っていた「BT」からはじまる箱番号を記し、元の木箱の中に包みや袋などの区分が認められたものについてはハイフンの後にその区分を、さらにその後ろに区分内での資料番号を記す。例えば、箱の中に区分が認められなかった遺物につけられた「BT1-4」という注記は、渤海の1番目の木箱に入っていた4点目の資料を意味し、箱の中に複数の区分が認められた場合は「BT46-4-1」のような資料番号が付される。すなわち、渤海の46番目の木箱の4つ目の区分に入っていた1番目の資料を意味している。このようにして2004年11月末までに、渤海遺物の洗浄・注記などの基本的な整理作業は完了した。再整理された上京城出土遺物のうち、瓦当紋様と文字押印瓦については田村が、平瓦と丸瓦については清水信行が、金属製品については笹田朋孝が考察し、田村編『東アジアの都城と渤海』の第二部で報告した(田村2005a)。

『東アジアの都城と渤海』の刊行後、田村は上京城遺跡出土の磚の集成・研究を進めた。考古学研究室の修士課程に進学していた筆者は、引き続き田村を手伝い、上京城遺跡出土方磚・長方磚の実測や拓本を担当した。この時期、筆者は駒場キャンパスに所在する東京大学駒場博物館において米内山庸夫資料の整理作業にも従事していたため、同博物館にも上京城遺跡出土遺物が存在することを確認していた。2007年に出さ

れた田村の報告書『渤海都城の考古学的研究Ⅱ』(田村2007)には、駒場博物館の収蔵品も収録されている²²⁾。

田村による東京大学所蔵渤海遺物の台帳作成は、2008年を以て終了する。「東京城出土遺物台帳」と題するこの田村台帳の写しが、2010年3月に考古学研究室に提出された。一緒に提出された「この台帳について」という書類に記されるように、記載された遺物は東京大学考古学研究室の列品室および地下倉庫の収蔵品と、駒場博物館が所蔵する紋様磚だけであり、当時総合研究博物館に保管されていた資料は含まれていない。なお、この田村台帳の写し1枚目には「(08,6,5訂正分)」と田村の直筆で記される。台帳記載遺物のうち、八連城遺跡出土のもの、あるいはその可能性があるものについて、田村はその旨「記事」とする備考欄等に記載するが、BT137からBT140の箱に収められた資料については手書きの書き込みが多く認められ、最後まで八連城出土遺物の抽出を試みていたことが窺われる。

5. おわりに

2000年代は東京大学考古学研究室が保管する渤海遺跡関係資料の再整理が盛んに進められた時期であった。本稿で扱った考古学遺物以外にも、2004年度から2006年度にかけては國學院大學栃木短期大学の酒寄雅志と東京大学韓国朝鮮文化研究室の早乙女雅博が、東亜考古学会による上京城遺跡調査の図面や野帳、ガラス乾板写真などを再整理・検討するなど、戦前の東亜考古学会による渤海上京城遺跡の調査の経緯が解明されていった(酒寄2007)。

この間、中国では国家プロジェクト「東北辺疆歴史与現状系列研究工程」、通称「東北工程」がおこなわれ、朝鮮半島と中国の間では高句麗・渤海の歴史認識をめぐり激しい論争が生じた。しかし、その結果、中国・ロシア国内の渤海遺跡で大規模な発掘調査が進められることによって研究対象資料が急増し、中国・ロシア・韓国・日本の各国で渤海の考古学研究が盛んに進められた。2022年の拙文で述べたように、国境を越えた渤海の考古学研究には様々な障壁も存在するが(中村2022)、各国の先学諸氏の努力により今のところ学术交流の場が保たれている。とはいえ、筆者が渤海の考古学を始めたころから教えを賜った田村晃一・酒寄雅志の両氏はすでに鬼籍に入られ、東京大学考古学研究室所蔵資料の再整理中多くのご指導を賜った恩師、大貫静夫・後藤直の両氏も近年相次いで他界された。筆者の研究の進捗は必ずしも捗々しくはないが、先学諸氏からのバトンをつなぎ研究成果を残して

いければと願う。

当面の課題は、田村が課題として残した、東京大学所在の八連城遺跡出土遺物の内容および由来を解明することである。前述したように、東京大学に所在する渤海遺物の中には、斎藤甚兵衛（優）の調査に由来する遺物以外に、1942年7月に駒井和愛らが八連城遺跡の追加調査をした際の出土遺物が含まれている可能性がある。八連城遺跡出土遺物にはいくつかの種類の墨書き・朱書きの注記がある。これらの分析を通して、斎藤由来の遺物と、駒井由来の遺物の分別が可能であるか、現在分析を進めている。

なお、八連城南方の「第二廃寺」すなわち新生寺廟址で出土した石仏に類似する石仏が、その南西方向に位置する古城村1号寺廟址で数多く発見され、2015年第11期の『文物』で報告された（吉林大学边疆考古研究中心ほか2015）。遺跡では三燕系の瓦当紋様に「壬子年六月作」の銘がある瓦当も出土しており、遺跡の時期と性格をめぐって現在盛んに議論されているところである（宋玉彬2015・蔣璐ほか2022・小嶋2024など）。筆者は2002年以来の田村晃一による東京大学所蔵渤海遺物の整理・分析を引き継ぐことによって、渤海考古学のさらなる進展に貢献できる情報・研究成果を発信していきたいと考える。

謝辞

本研究の資料調査を遂行するにあたり、東京大学文学部考古学研究室の福田正宏准教授と新井才二助教、総合研究博物館の西秋良宏教授と金崎由布子助教、駒場博物館の折茂克哉助教には多大なご協力を賜りました。また、八連城遺跡出土遺物や古城村1号寺廟址については金沢大学古代文明・文化資源学研究所の小嶋芳孝客員教授から多くの情報をご提供いただきました。ここに記して謝意を表します。

なお、本研究はJSPS科研費JP20K01096、JP20H01323、JP23H00015の助成を受けたものです。

註

- 1) 昭和21年（1946）東京大学を定年退官。
- 2) 昭和40年（1965）東京大学を定年退官。
- 3) 昭和42年（1967）東京大学を定年退官。
- 4) 満鉄歴史調査部の設立の経緯や白鳥による踏査に関しては井上直樹（2013；2017）の論考が詳しい。
- 5) 東亜考古学会の報告書『東京城』（東亜考古学会1939）の「序説」には、白鳥による上京城遺跡の踏査が明治43年（1910）におこなわれた旨記されるが、これは明治42年（1909）の誤りであると『渤海海上の諸問題』（鳥山1968：125）や井上（2017）の論考から判断できる。拙稿（中村2017：26）には白鳥による上京城遺跡の調査が1910年であると記したが、これも1909年の誤りである。

- 6) 図8-1は白鳥が採集した方磚である。
- 7) 当初、白鳥はこの遺跡を金および渤海の王都と認識している（井上2017）。渤海の上京龍泉府址としてはじめて明確に記した邦文は、白鳥が監修した『満洲歴史地理』1（箭内他1913a）である。
- 8) 日本による傀儡国家。「満洲国」と表記されることが多いが、本稿では、以下便宜的に「」を外して記述する。
- 9) 三上と矢島は1934年の第2回調査にのみ参加。
- 10) 1922年にロシア人研究者が中心となって設立したハルビン市に所在する地方博物館で、正式名称は東省特別区文物研究会博物館であったが、1933年以降は北満特別区立文物研究所博物館として運営していたか（君塚2001）。
- 11) 東亜考古学会の報告書における遺構の名称は、鳥山の命名法則を踏襲したものと思われるが、その後の中国の発掘調査報告書（中国社会科学院考古研究所1997；黒龍江省文物考古研究所2009）等における名称とは異なる点には注意が必要である。
- 12) 寺址発掘物の量はRef.B05015879500（第51画像目）には合計5箱、Ref.B05015879600（第3画像目）には合計6箱となっており、齟齬がある。
- 13) Ref.B05015879600（第79画像目）。
- 14) 斎藤は1930年4月から1937年3月末まで京都帝国大学において濱田耕作や梅原末治から考古学の指導を受けていたという（斎藤〔小野智子翻刻・注解〕2015：141）。
- 15) 斎藤は「文教部」と記すが、前述の通りこの頃は民生部となっていたはずである。なお、1943年4月1日の機構改革により、再度文教部が設置された。
- 16) これも民生部の誤りではないと思われる。
- 17) アジア歴史資料センター「古文書に見る日米交渉：開戦への経緯」のHPのうち「トピックス：関特演」（<https://www.jacar.go.jp/nichibei/reference/index08.html>）を参照。（最終閲覧日：2025年2月5日）
- 18) 15)に同じ。
- 19) 「渤海東京龍原府址」の誤植と思われる。
- 20) 同上。
- 21) 亀井明德（1999）の「渤海三彩陶試探」に写真あり。文中の「中国歴史博物館」は、2003年、隣接する中国革命博物館と統合され、現在の中国国家博物館となった。
- 22) 駒場博物館所蔵資料について、『渤海都城の考古学的研究Ⅱ』（田村2007）の図版目次「BT番号」の項目では「駒場美」と記される。2003年の改築工事以前、駒場博物館は「美術博物館」の名称で呼ばれていたからである。

引用文献

- 井上直樹 2013 『帝国日本と〈満鮮史〉』塙書房
- 井上直樹 2017 「白鳥庫吉の満洲踏査：国立公文書館アジア歴史資料センター所蔵文書の分析を中心に」『中国考古学』17：49-69
- 大出尚子 2004 「『満洲国』国立中央博物館と『満洲国』の建国理念：副館長藤山一雄の『民族協和』構想」『社会文化史学』46：41-62
- 大出尚子 2010 「『満洲国』国立博物館の展示における『満洲色』の創出：高句麗・渤海・遼の古蹟調査を背景として」『内陸アジア史研究』25：121-142
- 外務省特殊財産局 194- 『中華民国よりの掠奪文化財総目録』

- 録 別冊』国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1906139> (参照 2025-02-06)
- 亀井明德 1999 「渤海三彩陶試探」『アジア遊学』6, 勉誠社, 82-98
- 吉林大学边疆考古研究中心・吉林省文物考古研究所・琿春市文物管理所 2015 「吉林琿春古城村1号寺廟址遺物整理簡報」『文物』11: 27-48
- 君塚仁彦 2001 「『満洲国』社会教育政策と博物館に関する考察(1)」『東京学芸大学紀要1部門』52: 11-23
- 黒龍江省文物考古研究所 2009 『渤海上京城: 1998～2007年度考古発掘調査報告』文物出版社
- 小嶋芳孝 2001 「斎藤コレクションの渤海・女真関係資料」田村晃一編『『日本道』関連渤海遺跡の考古学的調査』平成11・12年度科学研究費補助金〔基盤研究(B)(2)〕研究成果報告書
- 小嶋芳孝 2005 「図們江流域の渤海都城と瓦当」田村晃一編『東アジアの都城と渤海』東洋文庫, 155-186
- 小嶋芳孝 2024 「古城村1・2号寺址と図們江下流域の渤海仏教寺院」網 伸也編『東アジア都城と宗教空間』京都大学出版会, 361-379
- 駒井和愛 1950a 『遼陽発見の漢代墳墓』考古学研究 1, 東京大学文学部考古学研究室
- 駒井和愛 1950b 「渤海の仏像: 特に二仏並座石像について」『遼陽発見の漢代墳墓』東京大学文学部考古学研究室, 付録1-7
- 駒井和愛 1960 「渤海東京龍原府宮城址考」『慶祝董作賓先生六十五歳論文集』上冊, 中央研究院歴史語言研究所(再録: 1974『中国考古学論叢』慶友社, 429-439)
- 崔 夢龍・鄭 永鎬・宣 逸 1998 『서울大 博物館所蔵 渤海遺物』서울大學校博物館
- 斎藤甚兵衛 1942a 「満洲国間島琿春県半拉城に就いて」『考古学雑誌』32(5): 224-256
- 斎藤甚兵衛 1942b 『半拉城: 渤海の遺蹟調査』琿春県公署
- 斎藤甚兵衛 1943 「琿春」『満洲古蹟古物名勝天然記念物保存協会会誌』5, 満洲事情案内所, 1-66
- 斎藤 優 1978 『半拉城と他の史跡』半拉城刊行会
- 斎藤 優(小野智子翻刻・注解) 2015 『斎藤優遺稿集: 渤海半拉城址発掘史にみる近代東アジアの軍事と文化』
- 酒寄雅志編 2007 『東亜考古学会と近代日本の東アジア史研究』平成16年度～平成18年度科学研究費補助金〔基盤研究(C)〕研究成果報告書
- 酒寄雅志 2023 『渤海と日本』吉川弘文館
- 白鳥庫吉 1970 「金の上京に就いて」『白鳥庫吉全集』5, 岩波書店, 462-583(原載1909年11月27日, 南満洲鉄道会社歴史調査部満洲史料展覧会講演速記)
- 蔣 璐・趙 里萌・解 峰 2022 「琿春古城村1号寺廟址始建年代及出土造像研究」『文物』6: 84-96
- 宋 玉彬 2015 「試論佛教傳入図們江流域的初始時間」『文物』11: 62-69
- 田村晃一 2001 「渤海の瓦当文様に関する若干の考察」『青山史学』19: 1-19
- 田村晃一 2005a 『東アジアの都城と渤海』東洋文庫
- 田村晃一 2005b 「渤海上京龍泉府(東京城)出土遺物の整理と調査」田村晃一編『東アジアの都城と渤海』東洋文庫, 187-190
- 田村晃一 2007 『渤海都城の考古学的研究Ⅱ』東洋文庫
- 田村晃一 2011 『クラスキノ: ロシア・クラスキノ村における一古城跡の発掘調査』渤海文化研究中心
- 中国社会科学院考古研究所 1997 『六頂山与渤海鎮: 唐代渤海国的貴族墓地与都城遺址』考古学專刊, 丁種56, 中国大百科全书出版社
- 東亜考古学会 1939 『東京城: 渤海国上京竜泉府址の発掘調査』東方考古学叢刊, 甲種5
- 統監府臨時間島派出所残務整理所 1910 『統監府臨時間島派出所紀要』
- 東京大学文学部考古学研究室 1952 『考古図編』12, 美術工芸会
- 東京大学文学部考古学研究室 1958 『考古図編』16, 美術工芸会
- 東京大学文学部考古学研究室 1959 『考古図編』17, 美術工芸会
- 東京大学文学部考古学研究室 1960 『考古図編』18, 美術工芸会
- 東京大学文学部考古学研究室 1964 『考古図編』20, 美術工芸会
- 東京帝国大学文学部考古学研究室 1927 『考古図編』1, 美術工芸会
- 東京帝国大学文学部考古学研究室 1930 『考古図編』4, 美術工芸会
- 鳥山喜一 1915 『渤海史考』奉公会
- 鳥山喜一 1935a 『北満の二大古都址: 東京城と白城』京城帝国大学満蒙文化研究会
- 鳥山喜一 1935b 『満鮮文化史観』刀江書院
- 鳥山喜一 1937 「満洲国間島省内古蹟調査略報」『考古学雑誌』27(8): 550-554
- 鳥山喜一 1938 「渤海東京考」『史学論叢』1, 京城帝国大学文学会, 303-355
- 鳥山喜一 1939 『渤海国小史』満日文化協会
- 鳥山喜一 1949 『失はれたる王国: 渤海国小史』翰林出版
- 鳥山喜一 1968 『渤海史上の諸問題』風間書房
- 鳥山喜一・藤田亮策 1942 『満洲国古蹟古物調査報告』3, 間島省古蹟調査報告, 満洲帝国民生部
- 中村亜希子 2006 「渤海上京龍泉府址出土軒丸瓦の編年」『東京大学文学部考古学研究室紀要』20: 71-108
- 中村亜希子 2017 「三次元計測データを用いた瓦研究: 東亜考古学会による渤海上京城発掘資料の再検討」『中国考古学』17: 21-47
- 中村亜希子 2021 「渤海国の瓦塼の変遷と系譜: 紋様塼を読み解く」大貫静夫編『中国考古学論叢』同成社, 247-268
- 中村亜希子 2022 「渤海瓦塼研究の諸問題: なぜ、考古学者は瓦を研究するのか」古畑徹編『高句麗・渤海史の射程』汲古書院, 31-54
- 三上次男 1947a 「渤海の瓦(1)」『座右宝』10・11, 座右宝刊行会, 40-48
- 三上次男 1947b 「渤海の瓦(承前)」『座右宝』12, 座右宝刊行会, 26-31
- 三上次男 1968 「半拉城出土の二仏并座像とその歴史的意義」『朝鮮学報』49, 333-348
- 三上次男 1990 『高句麗と渤海』吉川弘文館
- 三宅俊成 1985 『在満二十六年遺跡探査とわが人生の回想』

三宅中国古代文化調査室

松井 等 1913 「渤海国の疆域」『満洲歴史地理』1, 407-441

森田智子 2012 「渤海半拉城出土『二仏並座像』の基礎的整理」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊』19-2, 301-310

森田智子 2014 「台湾国立故宫博物院所蔵の渤海二仏並座像について」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊』22-1, 95-105

箭内 互 1913 「三国時代の満洲」『満洲歴史地理』1, 204-226

箭内 互・稲葉岩吉・松井 等 1913a 『満洲歴史地理』1, 南満洲鉄道株式会社

箭内 互・稲葉岩吉・松井 等 1913b 『満洲歴史地理』2, 南満洲鉄道株式会社

JACAR（アジア歴史資料センター）

「満洲国政府公報日譯 大同元年6月・7月分(第11号～第30号)」

JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.A06031008800、満洲国政府公報日譯（国立公文書館）

「4. 東亜考古学会研究報告刊行助成 昭和十三年十五年」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B05015875200、研究助成関係雑件／出版助成関係雑件 第六卷（H.6.2.0.4_006）（外務省外交史料館）

「2. 旅順附近石器時代ノ遺跡発掘事業助成 東亜考古学会 昭和七年七月」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B05015878600、研究助成関係雑件 第三卷（H.6.2.0.3_003）（外務省外交史料館）

「3. 吉林省旧渤海国東京城趾調査事業助成 東亜考古学会 昭和八年五月 至昭和十年 分割1」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B05015879500、研究助成関係雑件 第四卷（H.6.2.0.3_004）（外務省外交史料館）

「3. 吉林省旧渤海国東京城趾調査事業助成 東亜考古学会 昭和八年五月 至昭和十年 分割2」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B05015879600、研究助成関係雑件 第四卷（H.6.2.0.3_004）（外務省外交史料館）

「7. 東亜考古学会ニ対スル助成金監査 東亜考古学会 昭和

十一年四月」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B05015893600、研究助成関係雑件／東亜考古学会関係（H.6.2.0.4-1）（外務省外交史料館）

「8. 東亜考古学会組織改革方ノ件 東亜考古学会 昭和十一年九月」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B05015893700、研究助成関係雑件／東亜考古学会関係（H.6.2.0.4-1）（外務省外交史料館）

「20. 協会解散」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B05016057200、日満文化協会関係雑件／設立関係附本邦ヨリ服部博士外8名渡満（H.6.2.0.29-1）（外務省外交史料館）

「12. 満洲ニ於ケル「古蹟保存法」制定 昭和八年六月」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B05016153400、参考資料関係雑件 第二卷（H.7.2.0.4_002）（外務省外交史料館）

図表出典

図1：『東亜大陸図：二百五十万分一』（京都大学所蔵近代教育掛図：RB00023880）を改変

<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00023880>

図2：『東京城』（東亜考古学会1939）附図2「渤海国上京龍泉府址全図」を改変

図3：アジア歴史資料センター（原本所蔵：外務省外交史料館）Ref.B05015879600 第3画像目を引用

図4：『満洲国古蹟古物調査報告 第3編 間島省古蹟調査報告』（鳥山・藤田1942）の図版第26を引用

図5：「渤海東京考」（鳥山1938）の挿図2を引用

図6：『半拉城と他の史蹟』（斎藤1978）「半拉城址附近實測平面図」を引用

図7：『中華民国よりの掠奪文化財総目録 別冊』（外務省特殊財産局194-）より9・10画像目から該当部分を抜粋し、作成

図8：『考古図編』より引用

1：第4輯（東京帝国大学1930）図版30、2：第16輯（東京大学1958）図版24-2、3・4：第17輯（東京大学1959）図版22、5：第18輯（東京大学1960）図版16-3、6：第12輯（東京大学1952）図版19

表1：筆者作成

A Brief Review of the Artifacts Excavated from the Bohai Sites in the Collection of the University of Tokyo

Akiko NAKAMURA

Currently, the Department of Archaeology, the University Museum (UMUT), and the Komaba Museum at the University of Tokyo store artifacts excavated from the Bohai sites. Most of these were acquired by the Far Eastern Archaeological Society during the excavations at the Shangjingcheng site or Dongjingcheng (located in Ning'an, Heilongjiang Province) in 1933 and 1934. However, some of them are from Jinbei (Masaru) Saito's excavation of the Baliancheng site or Banlacheng (located in Hunchun, Jilin Province). Reports on these investigations have been published, but it is known that other small-scale investigations were carried out, from the papers and memoirs by Kiichi Toriyama, Masaru Saito, Kazuchika Komai, and others. Perhaps due to the worsening war situation and the confusion following Japan's defeat in August 1945, no excavation reports have been published. In addition, no active investigation or research on these artifacts was conducted for about 30 years after the retirements of the investigators, such as Komai and Tsugio Mikami, from the University of Tokyo. In the 2000s, Koichi Tamura led a re-investigation and reported on the artifacts. Despite this, much contextual information was lost in the meantime, and many points remain unclear about the circumstances under which the artifacts were excavated and how they were transferred to the University of Tokyo.

In this paper, I first examined the surveys of the Bohai ruins conducted by Japanese researchers before and during the Second Sino-Japanese War, focusing on surveys that involved excavation and clarifying the process and background of these surveys. Next, I examined the documents that the Republic of China requested for returning after the war, and regarding the research of Satoko Ono/Morita (2014) who tracked down the stone Buddhas excavated from the Baliancheng site that was returned in fact to the Republic of China government in Taiwan in 1951. I analyzed the contents of the Baliancheng artifacts published in *"Select specimens of antiquities in the Archaeological Seminary, The University of Tokyo"* edited by Komai after the war. I pointed out that the Baliancheng artifacts currently stored at the University of Tokyo possibly include artifacts that were excavated when Komai and others conducted additional research at the Baliancheng site in July 1942. Finally, I described the background and policy of the curation of Koichi Tamura in the 2000s which has not been published, and provided basic information for future research on the Bohai artifacts stored at the University of Tokyo.